

園の取り組み事例①

あけぼの愛育保育園（福岡県北九州市・私営）

園の理念や使命を脅かす リスクをあぶり出して 平常時から危機に備える

取り組みの ポイント

- 園の使命である「子どもの健全育成と保護者の就労支援」を阻害する要因はすべて園の「危機」と考える。
- 「人はミスをする」を前提として、対策のしくみを構築する。
- 「平常時にできないことは緊急時にもできない」と考え、平常時の備えを大切にする。
- 子どもが自身の安全を守る姿勢を育てるサポートを行う。

（2021年10月上旬取材）

子どもの健全育成と保護者の就労支援を守るために

子どもと保護者を支えるため 園ができることを考え続けた

「いつくしみ はぐくみ なごみ」をスローガンに、子どもや保護者、地域住民とともに成長することをめざす、あけぼの愛育保育園。その危機管理の基本となるのは、「子どもの健全育成と保護者の就労支援を守る」という考え方です。北野久美園長は、次のように話します。

「園の使命である子どもの健全育成や保護者の就労支援を脅かす要因は、すべて園の危機と捉えています。感染症や自然災害だけでなく、近隣住民からの苦情も職員の健康問題もそうですし、連絡帳の誤字も保護者からの不信につながるため、危機と考えます。そうした危機にどう対応して、子どもや保護者を支えるかを考え続けています」

新型コロナウイルスの感染が広がる状況でも、



園長
北野久美先生

お話ししてくださった先生方



主幹
中村千春先生

その方針は揺るぎませんでした。昨年の緊急事態宣言下に多くの子どもが家庭で過ごした時期は、「この状況でいかに子どもの生活や成長を支え、保護者を支援するか」を職員間で話し合いました。そして、子どもが園とのつながりを感じながら充実した時間を過ごせるように、担任が一人ひとりの名前を呼びかけて遊びや歌、体操などの活動に導く動画を配信したり、園庭で図書を貸し出ししたりして、さまざまなサポートを行いました。保護者への支援では、SNSを活用した相談受け付けや

ウェブサイトでの情報発信、食事の献立の紹介などのほか、通信環境が未整備の家庭に配慮し、手紙や情報誌の郵送も行いました。

登園が再開された後は衛生対策を徹底するとともに、「子どもにとって本当に必要な活動はとめない」という方針のもとで保育や行事を見直し、小集団での活動を取り入れたり、行事は二部制にしたりしています。しかし、従来と比べて、人とのつながりが希薄になりやすいことなどに課題を感じています。

「運動会で年長児の姿を見て憧れたり、友だちの保護者から褒められたりといった、人とのつながりを通した育ちが得られにくく、また、保護者同士の関係がつくりにくい状況も、保護者自身の成長にとってはマイナスです。現在は、ワクチン接種や感染者数の状況を見ながら、どのような形で活動の集団を大きくしていくかなど、今後を見据えた話し合いを続けています」（北野園長）

保育者の気づきをもとに 園内外のリスクを顕在化

コロナ禍では想定外の事態が続き、事後的な対策が中心とならざるを得ませんでした。園では日頃から園内に潜むさまざまなリスクを顕在化させて、事前に対策できるように取り組んでいます。

保育者の「当事者意識」によって危機管理の実効性が高まる

「人はミスをする」を前提に 「しくみ」でリスクを排除する

対策を講じる上で前提としているのは、「人はミスをする」という考えです。そのため、保育者の「心がけ」に頼るのではなく、ミスを防ぐ「しくみ」を整えることに重点を置いています。

その一環として、多くの業務において「声出し・指差し・後見ぐせ^{あとみぐせ}」を意識し、チェック表への記入をルール化しています。例えば、門やドアの施

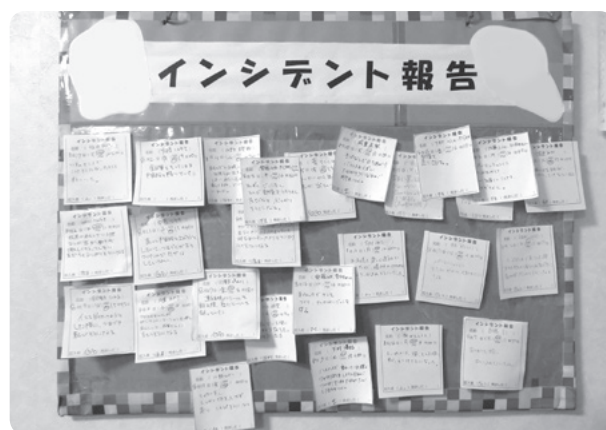


写真1 全職員が普段からインシデント報告の用紙をポケットに入れており、気づいたことがあるとその場で書き込んで、園内で共有しています。

その1つが、「インシデント報告」です（写真1）。職員室のだれもが目にする場所に設置された掲示板に、保育者や事務職員など全職員が実際に起きた事故やトラブル、「ヒヤリハット」の事例などを貼っていきます。それを分類、集計して、職員会議などで取り上げて対策を講じます。主幹の中村千春先生は次のように話します。

「子どもが転びやすい場所などがわかって対策することもありますし、同じ子どもだけが転ぶ場合は『靴のサイズが合っていないのでは』『目の見え方に課題があるのでは』など、さまざまな意見を交わしてリスクを特定していきます。こうした話し合いを通して、保育者の危機管理に対する意識も高まっていきます」

錠は1か所につき必ず3人が確認をして、チェック表に記入します。

また、子どもが園庭で着替えが必要になった場合は、近くにいる保育者がインカムを使って職員室の保育者に状況を伝えます。すると、職員室の保育者は、「〇〇ちゃんのために、△△を何枚持っています」と声に出して周囲から返事をもらい、チェック表に記入して対応します。

「一見、作業がどんどん増えて忙しくなるように感じるかもしれませんが。しかし、インシデント報

告なども含め、内部で見えるものは清書などを求めず簡便化していますし、小さな確認を怠って事故が起こったら、その対応の方が多大な労力を要します。結果的には負担軽減になっていると考えています」(北野園長)

子どもが自分の心と体を 守る姿勢を育てる

危機管理の一環として、子どもが自身の安全を守る姿勢を育てるサポートにも力を注いでいます。生活習慣や体調を振り返って記入する「生活健康管理チェック表」はその1つです(写真2)。

生活健康管理チェック表には、「あさごはん」「はみがき」「てあらい」「ちゅうしょく(のこさずたべた?)」「たのしく(おともだちとはあそべたかな?)」などの17項目を設けています。4歳児以上は自分で記入し、2・3歳児は保育者が子どもから話を聞いてチェックします。

「生活や体調を見つめ直して自分の状態を自覚することは、自分の身を守るための最初の一步です。毎日の記入を通して、自分の心や体を大切にする気持ちが育ってほしいと願っています」(北野園長)

生活健康管理チェック表は保護者とも共有することで、家庭での過ごし方や生活習慣の見直しにもつながると考えています。

平常時にできないことは 緊急時にもできない

危機管理について、「平常時にできないことは緊急時にもできない」というのが北野園長の考えです。そのため、毎年、東日本大震災が発生した3月11日の前後には、若手保育者が火起こしを担当して備蓄食材を調理し、子どもたちと屋外で過ごす練習も行っています。また、北野園長は、国内で自然災害が発生すると、保育者の協力を得て物

生活健康管理チェック表 (以上児)		なまえ																	
月	日	あつちでは どうかな?				きれいかな? げんきかな?				わすれものない?				できたかな? けがしたかな?					
		あさごはん	はみがき	てあらい	ちゅうしょく	てあらい	つめ	からだ	あひざつ	ハンカチ	おべんとう	カッター	おしぼり	おたふく	おたふく	おたふく	おたふく	おたふく	
12/6		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12/7		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

写真2 子どもたちは毎日の振り返りを通して、次第に心や体の状態を自覚できるようになります。危機管理だけでなく、生活習慣の改善にもつながります。

資を集め、ボランティアとして現地を訪れる活動を続けています。

「一番の目的は復興に向けたお手伝いですが、現地を訪れて状況を知ることによって普段から備えるべきことに気づき、先生方に話したり対策として取り入れたりすることもねらいの1つです」(北野園長)

こうしたさまざまな活動を通して、園内の危機管理に対する意識は高まり、保育者が園内外のハザードマップを自発的に更新したり、積極的に対策を提案したりする姿につながっています。まさに一人ひとりの「当事者意識」こそが、危機管理の実効性を高めることを、あけぼの愛育保育園の取り組みは物語っています。

北野園長は、今後に向けた思いを次のように語ります。

「園は、子どもを預かるだけではなく、育てる場所でもあります。子どもを育てるとは、未来を保障することです。社会は変化し続けていますが、子どもの成長発達のある方は変わりません。時代の流れを適切に保育に取り入れながらも、子どもの育ちの基本はしっかりと押さえて、柔軟な姿勢で保育に取り組んでいきたいと考えています。厳しい状況が続きますが、これからも『楽しく・明るく・元気よく』の三拍子を忘れずに、子どもたちの育ちを支え続けていきます」

社会福祉法人愛育会
認定こども園
あけぼの愛育保育園

「いつくしみはぐみなごみ」をスローガンに掲げる。家庭や地域と連携して、養護と教育を一体化させ、豊かな人間性をもつ子どもを育成する保育を展開。

◎ 園長：北野久美生
◎ 所在地：福岡県北九州市小倉南区沼緑町2-1-40
◎ 園児数：80人(0～5歳)

園の取り組み事例②

第二早翠幼稚園 (福井県敦賀市・私営)

ICTを活用して 「次のミス」を減らし 園の社会的責任を果たす

取り組みの ポイント

- ミスや事故に加え、ミス一步手前の「ヒヤリハット」を全職員で共有する。その後文書化して、発生防止のPDCAサイクルを回す。
- 不都合な情報ほど素早く、正確に保護者や地域に伝える。
- ICTは、人同士のかかわりを大切にした保育の質向上と、園としての社会的責任を果たすための手段の1つとして、積極的に活用する。

(2021年10月上旬取材)

不都合な情報ほど、迅速・正確に伝える

失敗はだれにでもある。だからこそ 繰り返さないしくみをつくる

第二早翠幼稚園は、市内に4つの教育施設をもつ学校法人が運営する幼稚園です。同園では「ミスが起きた場合、それはたまたま表面化した氷山の一角に過ぎず、裏にはたくさんのミスの芽が隠れている」と捉えています。この考えのもと、ミスや事故はもちろん、それらの一步手前の事例、いわゆる「ヒヤリハット」までを、4施設で約150人の職員全員で共有する体制を整えています。

ミスが発生すると、職員が必要な対応を行った上で、概要や経緯を「不適合・クレーム／事故／ミス記録表」というA4用紙1枚ほどのシート(P.10 図)に入力し、すべての職員が閲覧できるメーリングリストに投稿します。シートの内容は一定期間ごとにミスの種類や特徴などで分類し、集計・分析します。重要度が高いものは保育方法



園長
徳本達之先生

お話ししてくださった先生方



主任
山口依里子先生

や体制の変更といった改善策を講じ、その成果も検証するというPDCAサイクルを回しています。

徳本達之園長は、普段から職員に向けて、「どんな人もミスをする。ただ、それを隠したり小さく見せたりしてはいけない」と話しています。

「保護者との小さなトラブルを、保育者が1人で抱え込んだために状況が悪化し、先輩保育者や園長の耳に入ってきたときには修復が難しくなっていた、という例を多数経験してきました。そうしたことが起こらないように、報告・連絡・相談の大切さを伝え、都合の悪い情報ほど共有するのが

当然、という雰囲気をくつくるようにしています」

その思いを徳本園長自身が行動で示す事態が、2021年2月に起きました。職員の1人が、新型コロナウイルス感染症の陽性者となったのです。その際、保護者はもちろん第三者に対しても、出せる情報はすべて迅速、詳細に発信していきまいた。

「陽性の第一報を受けたとき、公表せずに穏便に済ませたいという気持ちがあったことは否認しません。しかし、隠しても必ず後で明らかになり、より大きなダメージを受けることになります。幼稚園という社会的な責任を負う組織として、常に公明正大に振る舞うべきだと考えました」(徳本園長)

園のウェブサイトや、保護者には専用のメールシステムなどを使って、早い段階から情報を発信した結果、保護者からのクレームはなく、むしろ「園は隠し事をしないから安心して次の情報を待っている」との声が寄せられたといっています。

公開型の行事が減る中 子どもの様子を動画で伝える

同園では普段から人同士のかかわりを大切にしていますが、After/With コロナの時代には「ICT対応力」がこれまで以上に園運営に不可欠な要素になると、徳本園長は考えています。

「対面での活動や保護者参加型の行事が制限される中、子どもたちの様子は、保護者専用のアプリを使い、画像と説明の文章によって伝えていきます。園児募集や保育者の採用・面接などはSNSやウェブサイトを活用することでカバーできました」

主任の山口依里子先生は、ICTを活用した保育の手応えを次のように話します。

「9月の敬老の日の公開保育がコロナ禍で開催できなくなりました。そこで、園の様子をライブで配信するページを作り、そこにアクセス可能な二次元コードをつけた手紙を祖父母の方々に渡して、見ていただくことにしました。結果は大変好評で、

図 ミス報告のためのシート

不適合・クレーム/事故/ミス記録表			
発生場所	発生時刻	発生人物	発生内容
担当	報告者	責任	調査
発生場所	発生時刻	発生人物	発生内容
不適合等の種類	<input type="checkbox"/> 未入場 <input type="checkbox"/> 退場	<input type="checkbox"/> サービス係 <input type="checkbox"/> クラーム	<input type="checkbox"/> サービスの提供プロセス <input type="checkbox"/> 品
不適合等の原因			
不適合等の対応	原因	対応	
不適合等の発生時	<input type="checkbox"/> 修正(手直し) <input type="checkbox"/> 再発防止 <input type="checkbox"/> 退場、半退場、退場 <input type="checkbox"/> 影響に達感がかからない状態 <input type="checkbox"/> その他	<input type="checkbox"/> 修正(手直し)の実施内容	
	<input type="checkbox"/> 再発防止の判定 <input type="checkbox"/> 影響に達感がかからない状態	<input type="checkbox"/> 修正(手直し)の場合の再発防止記録	
	<input type="checkbox"/> 再発防止 <input type="checkbox"/> 再発防止	<input type="checkbox"/> 再発防止 <input type="checkbox"/> 再発防止 <input type="checkbox"/> その他	
発生	ML、職員会議	朝礼	朝礼、電話、他
水準確保	<input type="checkbox"/> 是 <input type="checkbox"/> 否		
発生防止の必要性	<input type="checkbox"/> 是 <input type="checkbox"/> 否		
発生防止策	実施		
発生防止の再発	年 月 日		
発生防止の再発	年 月 日		

同園は、品質管理の国際統一規格であるISO9001を取得しており、シートの書式はISOの規格にのって作成しました。ミスへの対応も、ISOで定めたマニュアルをもとに運用しています。

制限された中でも子どもの様子や情報を伝えられるのが、ICTの持ち味の1つだと実感しました」

徳本園長は、コロナ禍を機に社会全体のICT化が加速していく中で、幼児教育がその流れに取り残されることを懸念しています。

「かつて、園や学校は地域の最先端を行く存在で、そこにしかない設備や道具がたくさんありました。ところが現在は逆で、デジタル端末を使いネットでコミュニケーションをとる、といった家庭ではあたり前のことが、多くの園や学校では試行錯誤している状態です。今後も、園が地域の中で重要な役割を担うことは確実ですから、私たちも社会の流れに合わせてICTを活用する努力が必要だと思います。その結果、説明責任を果たし、業務も効率化して、保育の質向上のための時間を生み出せる、といった効果も見込めます」(徳本園長)

ただし、保育の本質は子どもとのかかわりの中にあり、ICTは保護者や保育者といった人同士のかかわりを含めた保育の質を高めるツールに過ぎないと、徳本園長は話します。保育の本質を堅持しながら、今後の園運営にも柔軟な姿勢でICTを活用し、危機管理に努めていこうとしています。

学校法人早翠学園
幼保連携型認定こども園
第二早翠幼稚園

1916(大正5)年、幼児教育の必要性を痛感した仏教寺院の住職が創設。大学や民間企業との連携や、広大な敷地を生かした自然体験活動にも力を注ぐ。

- ◎ 園長：徳本達之先生
- ◎ 所在地：福井県敦賀市市野々町 1-110
- ◎ 園児数：255人

園の取り組み事例③

玄海ゆりの樹幼稚園（福岡県宗像市・私営）

情報共有により リスクを顕在化させ 園の安全を高め続ける

取り組みの ポイント

- 園バスは、安全管理の徹底はもちろん、走行位置を保護者とリアルタイムに共有するなどして安心感を高める。
- 日報をデータベース化して、過去のケガやトラブルなどの事例を共有し、危機管理に活用する。
- 新型コロナウイルス対応を通して浮かび上がった課題をもとに、今後の危機管理のあり方を検討する。

（2021年10月上旬取材）

地道な安全確認でリスクを見つけ出し、一つひとつ丁寧に対応する

重大事故の危険をはらむ 園バスの安全運行に注力

山と海に囲まれた自然豊かな地にある玄海ゆりの樹幼稚園は、子どもたちが体を使って元気いっぱい遊ぶ姿が印象的な園です。高杉洋史園長は、危機管理の方針を次のように語ります。

「子どもには夢中で遊んで大きく育ててほしいからこそ、一つひとつのリスクを見逃さず、丁寧な対策を施しています」

園が重点を置く危機管理の1つが、園バスです。250人の園児のほとんどが利用しており、4台のマイクロバスが市内8コースを巡ります。1つのミスが重大事故につながりかねないため、平常時からさまざまな事故を想定して対策しています。

保護者とは、標高や避難場所を明記した「防災バスマップ」を共有するほか、園バスにはGPS機



園長 高杉洋史先生

お話ししてくださった先生方

主任 溝口明子先生

主任 早田亜希子先生

能を搭載し、常時、スマートフォンから位置情報を確認できるようにして安心感を高めています。災害発生時に電話が通じなくなる事態も想定し、園バスにはIP無線機も設置しています。

園内外の環境の安全確認にも余念がありません。施設内では、手指を挟んだり、服を引っ掛けたり、物が倒れて落ちたりしそうな箇所がないかを常時点検します。また、園庭や外回りでは、刺さったり、崩れ落ちたりする危険がないかを入念に確認します。各学期末には、園内環境や設備に関して安全対策や修理が必要な箇所がないか、気づいたこと

を保育者が提出するようにしています。

園内外に潜む見えないリスクを見つけ出すために重視するのが、終礼でのクラス間の情報共有です。主任の溝口明子先生は次のように話します。

「その日のできごとや子どもの様子、ケガやトラブルなどについて、報告や情報共有を行います。終礼では新たなリスクや対策についても話し合い、園の危機管理マニュアルを随時、見直したり、追記したりしています」

以前は20人近い保育者が順にその日のできごとを話して共有していましたが、パソコンで日報を作成して共有することで、終礼の時間を大幅に削減しました。日報は共有しやすいように1枚のシートに全クラスの情報を書き込む形式です(図)。3年前、県のICT化事業に関する補助金を利用して、複数のパソコンから同時にアクセスして入力できるソフトウェアを開発しました。日報作成が重なる時間帯も、保育者は不便を感じることなく入力できています。また、日報はデータベース化され、過去の事例をキーワードで検索することが可能です。主任の早田亜希子先生はこう話します。

「日報のデータベース化により、危機管理に関しても過去のさまざまな事例を参考にできるようになりました。例えば、子どもがケガをした際、保護者への説明前に本人やその兄姉のケガの履歴などを速やかに確認できるので、より丁寧な保護者対応ができるようになりました」

新型コロナウイルス対応を通して 危機管理上の新たな課題を認識

新型コロナウイルス対応では、市の方針に基づいた感染対策を徹底してきましたが、陽性者が出たときの対応では、いくつかの課題意識をもったといいます。その1つが非常時には教頭、主任などのミドルリーダーに業務が集中することです。保護者への情報発信や対応、保健所との打ち合わせ、小・中学校への連絡、行政への報告と対応の打ち合わせ、これらをまとめた具体的行動計画とその実行及び検証を、短時間に判断して実行しなければなりません。そうした事態をあらかじめ想定して、教頭、主任の業務量が増えた場合は、速やかに補佐をつけるなどの対策を検討しています。

最終的な判断と責任は園長の仕事ですが、保育者が初めてのことに立ち向かう勇気、そして、各自の意見を伝える力を育てることが一番の危機管理だと、高杉園長は考えています。

また、地域や行政との連携や情報交換の重要性も実感した高杉園長は、今後に向けて次のように話します。

「新型コロナウイルス対策は、本園だけでは完結しません。日頃から非常時を想定して、県や市の行政機関や近隣の小学校などとの連絡を密にしておくと、いざというときに慌てなくてよいと感じました。今後も潜在的なリスクの発見に努め、危機管理の取り組みを充実させていく考えです」

図 コンピュータ上で管理している日報

No.	日時	クラス	名前	事象	内容	報告者
1	2021/11/08 15:56	ゆめ		報告	昼食中に嘔吐。発熱はなく元気だったため、帰宅はしていません。	
2	2021/11/04 16:59	年長_ぶどう		報告	お母さまが10月30日に女の子をご出産されました。お名前が「○○○○」さんです。	
3	2021/11/02 16:29	ちきゅう		報告	扁桃腺の手術を11月17日にされるため、明日から11月いっぱいお休みされます。バスには長期シールを貼らせていただきます。	
4	2021/11/02 16:18	ゆめ		報告	内容：さんがさんのマスクをトイレに落してしまっ。理由は分かりません。さんともしっかりお顔をし、さんには幼稚園の不織布マスクをお預かりしております。担任より、双方にお詫びさせていただきます。	

その日の全クラスのできごとを1枚のシートにまとめて、終礼で共有します。ソフトウェアの改良により業務効率が高まりました。

学校法人高杉学園
玄海ゆりの樹幼稚園

子どもが興味・関心をもとに活動を自主選択する「ドリカムタイム」などで自信や自立心を育成。異年齢による「たてわり保育」「ティーム保育」にも力を注ぐ。

- ◎ 園長：高杉洋史先生
- ◎ 所在地：福岡県宗像市上八1974
- ◎ 園児数：250人(3～5歳)

園の取り組み事例④

ハッピードリーム鶴間（東京都町田市・私営）

リスクの性質を見定め 入念に対策をして 豊かな体験を保障する

取り組みの ポイント

- コントロールできない危険は排除し、コントロールできる危険は事前に予測して徹底的に対策する。
- 新型コロナウイルスに対してはクラスター対策の徹底で、コントロールできる範囲を広げる。
- ICT機器の活用により、危機管理の効果や効率を高める。
- 保育者の働きやすい環境を整え、気持ちや時間に余裕をもてるようにする。

（2021年10月上旬取材）

コントロールできる危険、できない危険を区別して対処する

リスクを予測し、対策して 子どもの活動を広げる

ハッピードリーム鶴間では「子ども中心」の遊びや活動を通して、自ら成長する力を伸ばす保育を大切にしています。その方針がよく表れているのが、毎年5歳児が川辺で自然を体験する「リバーキャンプ」という行事です（P.14 写真1）。多くの子どもが初めて保護者から離れて宿泊する中で、自分でやりたいことを考え、川で遊んだりしながら友だちとの時間を過ごし、大きく成長していきます。川遊びは危険を伴いますが、園ではコントロールできる危険と、できない危険を区別して準備を進めることで、子どもに豊かな体験を提供しています。土橋一智園長は次のように話します。

「知識も準備もない状態での川遊びには、コントロールできない危険がつきまといまいます。しかし、



お話ししてくださった先生

園長
つちしかずとし
土橋一智先生

事前にプールでライフジャケットを着用する体験をさせたり、川の危険性をしっかりと教えたり、監視員を適正に配置したりすることで、一定の範囲内において川遊びは、危険をコントロールできる場所となります。子どもたちはそうした中で楽しく遊び、チャレンジしているのです」

コントロールできない危険は排除し、コントロールできる危険には事前に対策を講じる。園では、そうした考え方を日常の危機管理にも生かしています。

例えば、園外への散歩では、入念な下見をして



写真1 園生活でもっとも楽しかったことに、リバーキャンプを挙げる子どもが多いといいます。危険を予測して入念に準備することで、子どもの体験の幅を広げています。土橋園長は、講演などの活動を通じて、水遊びの際のライフジャケット着用を広げる活動にも取り組んでいます。



写真2 「危険だから割れる器はすべて使わない」という考えではなく、リスクを見極めた上で陶器製の器を使っています。そのように危険をコントロールすることで、子どもの学びは広がっていきます。

詳細なマップを作成します。交通量が多い道路はコントロールできない危険が多く、想定外の事故が起こりかねないため、ルートから外します。

散歩に出かける際は、出発時、目的地への到着時、目的地からの出発時、帰園時に子どもの人数をカウントし、「お散歩日誌」に記入します。また、目的地への到着時、目的地からの出発時といった園外で行動を変えるときには、必ず携帯電話で連絡しています。そうした対策により、交通事故や子どもの置き去りなど、コントロールできる危険に備えているのです。

給食で用いる食器にも同様の危機管理の考え方が表れています。園では「大事に扱わないと割れる」といったことを体験的に学べるように、陶器製の食器を使っています（写真2）。これは、陶器は落として割れても大きな危険は生じないというリスク管理に基づいています。一方、コップは、水の量を視覚的に把握できるように透明のものを使用しますが、プラスチック製としています。ガラスは

割れると小さな破片が飛び散り、想定外の事故につながる恐れがあるからです。

クラスター対策の徹底で 少しでも活動の範囲を広げる

新型コロナウイルスは、コントロールできない危険と捉えています。それでも、玄関口に手洗いの水道を3台増設してウイルスを園内に侵入させない「水際対策」を徹底する、保護者が大勢集まる機会をなくす、といったクラスターを発生しにくくする工夫により、コントロールできる範囲を少しでも広げる努力を続けてきました。

「コロナ禍にあっても、子どもが伸び伸びと過ごせる環境をつくり、一人ひとりの成長を保障したいという思いで取り組んでいます。今後も『危険だから何もさせない』のではなく、私たちがコントロールできる範囲を見定めて、その中で遊びや活動を充実させていきます」（土橋園長）

組織力を引き出して、園の危機管理能力を高める

業務のICT化により 危機管理を効果的、効率的に推進

園では、2008年度に登降園や電子決済のシステ

ムを導入するなど、早くからICT化に取り組んできました。ICT化による効果は、情報共有の円滑化や業務効率化に加え、危機管理の面でも大きいといいます。例えば、土橋園長が着目したリスク

の1つが、保育者ごとに子どもの成長の見取りが異なることでした。

「子どものチャレンジを支えるためには、『この子は何がどこまでできるか』といった成長発達面の正確な把握が必要です。そこに保育者による個人差があると、育ちの保障に問題が生じるだけでなく、事故にもつながりかねないと考えました」(土橋園長)

そこで、一人ひとりの子どもの興味・関心や経験、生活習慣、性格などを入力することで、成長発達の様子を客観的に把握できるシステムを導入し、見取りの質の統一と共有を図りました。

そのほかにも、乳幼児突然死症候群の防止のために午睡時の呼吸や動きを見守るセンサーを導入したり、出入口にICゲートを設置して登録者以外の立ち入りを防いだりするなど、さまざまな機器を活用して園の安全性を高めています。

働きやすい環境づくりで 保育者の自発性を引き出す

土橋園長は、異業種から保育の世界に入った経歴をもちます。当初より園の現場には一般企業とは異なる組織風土があり、それが保育者の働きづらさにつながる場合があると感じていた土橋園長は、職場環境の整備に注力してきました。

「保育者の頑張りに頼るのではなく、だれもが無理なく時間内に仕事を終えられたり、人間関係のストレスを軽減できたりするしくみづくりが必要です。保育の現場で子どもたちに直接かかわるのは保育者です。保育者が気持ちや時間に余裕をもって働けることは、仕事の楽しさややりがいを高めるだけでなく、園の危機管理においても重要だと考えています」(土橋園長)

そのために、土橋園長はパソコンを導入してドキュメンテーションを始めとした書類を電子化するなど、業務のICT化を推し進めました。また、

事務職員を増員して、書類作成業務を移管させました。そのようにして、保育者の業務負担の軽減を図っていきました。

さらに風通しのよい人間関係をつくるために、外部からチームビルディングの講師を招くなどして、園組織のあり方についての研修を実施。だれもが平等にアイデアを提案し、自発的に動けるような組織づくりに努めました。同時に、指示系統を再確認して、それぞれの立場で「自分で判断してよいこと」「上司に相談してから判断すること」を明確化しました。

そうしたしくみが定着するにつれ、保育者の意識も変化していったといいます。

「保育のあり方や園の体制、働き方などについて、保育者の方から意見を提案してくれるようになりました。指示を待つのではなく、しっかりと考えて問題を解決できる組織に変わったことは、危機管理の面でも大きなプラスになっています」(土橋園長)

園の危機管理における園長の役割について、土橋園長は「最終的な責任をとることを、普段から言葉や態度で示すこと」と話します。園長という「砦」があるからこそ、各保育者はそれぞれの持ち場で、自分の責任を最大限に果たせるようになると考えています。その一方で、土橋園長は外部の会議などで留守にすることも多いため、「防災担当責任者」を設置して、非常時の対応についての共通認識を図るなど、バックアップ体制も整えています。このように同園では、組織の力を最大限に引き出すことで、園としての危機管理能力を高めているのです。

今後の保育のあり方について、土橋園長は各園に向けて次のように呼びかけています。

「少子化が急激に進む中で、幼児教育は大変革の時代を迎えています。各園が個々に努力するだけでは限界があります。ともに力を合わせて子どもの健全な成長を守っていきたいと思っています」

社会福祉法人龍美
ハッピードリーム鶴間

答えや方法を教えるのではなく、自ら気づき判断できる「心豊かな人として生きていく力」の育成をめざす。絵画や造形などを通して、感性を育む活動にも力を注ぐ。

- ◎ 園長：土橋一智先生
- ◎ 所在地：東京都町田市南町田 4-22-7
- ◎ 園児数：116人(0～5歳)